

水産研だより

【今回の内容】

- 1 ダム湖におけるコクチバス調査について
- 2 SEAFDEC参加国研修を行いました
- 3 水産研究所一日開放デーを開催しました



チョウザメ

1 ダム湖におけるコクチバス調査について

水産研だより第33号でもお伝えしたとおり、県内でもコクチバスの目撃情報が少なくありません。

本種は、外来生物法で特定外来生物に指定されており、生きたままで他の水域への移動等は禁止されています。冷水性が強く、遊泳力が高いため、河川上流域でも生息や繁殖が可能で、河川を通じて広範囲に分布が拡大し、アユやマス類、その他在来魚への被害が懸念されています。

当研究所では昨年度から、コクチバスの目撃情報のあるダム湖において、生息状況や産卵床の調査を行っています。ダム湖畔のいくつかの地点で、成魚・産卵床が確認されました。

船上から産卵床を目視で確認し、親魚が確認された産卵床周辺に簡易三枚網を仕掛けて捕獲・駆除を試みました。また、釣りによる試験的な駆除も実施しました。

今後も、引き続き調査や駆除を行い、効果的な対策を模索していきます。

外来魚駆除は、多くの方々の関心とご協力が不可欠です。心無い放流は断じて許さない、誤捕獲した個体は現地で駆除するなど、分布拡大が起こらないよう皆様のご協力をお願いします。

(生態環境部 鈴木)



産卵床

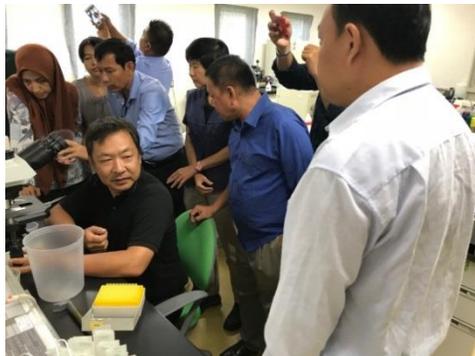


簡易三枚網で捕獲したコクチバス

2 SEAFDEC参加国研修を行いました

県では、2015年12月に「清流長良川の鮎」が世界農業遺産に認定されたことを契機に、開発途上地域からの研修生の受け入れなど国際貢献に取り組んでいます。

その一環として、2016年、東南アジア地域の内水面漁業の安定的な発展を目的に、岐阜県と東南アジア漁業開発センター（SEAFDEC）との間で技術協力に関する覚書が締結されました。この覚書に基づき、2017年からSEAFDEC参加国の研修生を受け入れています。



アユの精巢内精子の培養技術の実習

2018年は、8月28日から9月6日にかけて、タイ、インドネシア、フィリピン、マレーシア、カンボジア、ミャンマー、ラオスの7か国の政府機関の7名とSEA FDECの研究員1名（インドネシア籍）の計8名の研修生を受け入れて研修を行いました。



漁苗センターの視察



人工産卵河川の研究・取組紹介

研修では、岐阜県の水産業や養殖業、世界農業遺産「清流長良川の鮎」、清流の保全や生態系保全に関する講義の他、アユの種苗生産施設や漁業協同組合、チョウザメ等の養殖場の視察、人工産卵河川の造成とアユの精巢内精子の培養技術に関する実習が行われ、最終日には研修生と当研究所の職員らとの意見交換や、研修生から研修の感想や改善点に関するアドバイス等をいただきました。

(漁業研修部 武藤)

3 水産研究所一日開放デーを開催しました

去る8月5日に毎年恒例となっている水産研究所一日開放デーを下呂支所にて開催しました。この行事は、県民の皆様が川や魚に親しんでもらうとともに、私ども水産研究所の業務を理解していただくことを目的に、平成9年からほぼ毎年この時期に開催してきており、とりわけマス釣りやマスのつかみどりは、夏休み中の子供たちに毎年大人気のイベントです。

また、今年は岐阜県でアマゴの養殖が開始されてからちょうど50周年という節目の年に当たることから、展示スペースの一部を使って、アマゴ養殖の創世記に当研究所が深く関わっていたことや、本県のアマゴ養殖の歴史、当研究所が維持しているアマゴの系統などを紹介するパネル展示を行いました。

今年は全国的に「災害」と呼ばれるほどの猛暑が続く中、下呂市においても当日の最高気温は35℃以上となることが予想されたため、午後に予定していた二回目のマス釣りを急遽取りやめ、その分マスのつかみどりを早めるなど、熱中症予防のために異例の対応を執らざるを得ませんでした。幸い事故や大きなトラブル等もなく、無事終了することができました。

来場いただいた子供たちや保護者の皆様におかれましては、円滑な運営にご協力いただき、ありがとうございました。

(下呂支所 袖垣)



アマゴ養殖のパネル展示



マスのつかみどり